

教育課程および背景を理解する上での参考文献

今井福司（東京・白百合女子大学文学部共通科目 講師）

本稿においては、学校のカリキュラム、いわゆる教育課程を理解する上での参考文献を紹介したい。学校教育の中でも教育課程を取り上げるのは、それが筆者の研究分野であるということもあるが、それ以外の理由が決して無視できないためである。残念ながら教育課程について司書課程では、設定科目の性格上学ぶ機会はほとんど無いと言って良い。

一方で教育課程に関する科目は、小学校から高等学校まで教員免許状を取得しようとする人であれば必ず受講が求められる科目となっている。この点を踏まえると、教育課程を理解することは、単に学校教育に対する教養を深めるだけにとどまらず、教員とコミュニケーションを取る際の共通基盤となることに繋がると思われる。特に学校教育に学校図書館を位置づけようとするのであれば、教育課程の理解は必須であろう。以下では、教育課程を理解する上で参考となる文献を紹介していく。

まず教育課程を理解するために有用と思われるのが、
田中耕治, 水原克敏, 三石初雄, 西岡加名恵 著. 『新しい時代の教育課程 第3版』. 有斐閣, 2011. 343p ; ISBN 978-4-641-12431-8
である。同書は、教育課程編成の背景となる思想や政策、教育哲学に触れながら、教育課程の歴史や今日的課題を取り上げており、大学の教育課程論で教える内容はほぼ網羅されている。

次に、前述した図書の著者が執筆した
水原克敏 著. 『学習指導要領は国民形成の設計書』 東北大学出版会, 2010. 291p. ISBN 978-4-86163-147-4

は、カラー写真や図表が多く含まれ、より分かりやすく教育課程の歴史をたどることが出来るようになっている。ただし後半部分には主観が含まれている箇所が見受けられるため、その点については読み手が注意することが必要である。

そして、教育課程の歴史を踏まえることができれば、
今井康雄 編. 『教育思想史』 有斐閣, 2009. 336p. ISBN 978-4-641-12384-7 :
も読むことをお勧めしたい。これは教育学者が教育をどのように考えていたか、教育思想を専ら取り上げている書籍である。特に第4部「現代の教育思想」は、学校図書館の研究書で取り上げられることの多い、ジョン・デューイが登場し

ている。

最後に詳しくは紹介できないが、教育課程についてより理解を深めたい場合には、下記の 2 点をお勧めしたい。どちらもアメリカの学校教育カリキュラムを扱った資料であるが、それぞれが異なったアプローチからカリキュラムについての論考を展開している。決して気軽に読める資料ではないが、2 冊とも読み比べると教育課程が、単純な構造で構成されているのではなく、様々な要因が関与していることがより深く理解できると思われる。

佐藤学 著. 『米国カリキュラム改造史研究』東京大学出版会, 1990. 400, 7p.
ISBN 4-13-056089-1

ダイアン・ラヴィッチ 著 ; 末藤美津子, 宮本健市郎, 佐藤隆之 訳. 『学校改革
抗争の 100 年』東信堂, 2008. 638p. ISBN 978-4-88713-846-9